

5 : 分娩後の卵巣機能および発情行動の回帰に関する研究

獣医学科臨床獣医学講座 松井 基純

メールアドレス mmatsui@obihiro.ac.jp

研究の概要

【目的】

分娩後の卵巣機能および発情行動の回帰に影響を及ぼす要因を調べるために、分娩後の卵巣周期とそれに伴う発情行動の発現を調べる。また、血中性ホルモン測定および代謝プロファイルテストにより生殖内分泌と栄養代謝の状態を調べ、卵巣機能および発情行動回帰との関係を調べる。

【方法】

分娩後 10 日目から直腸検査および超音波画像診断装置により卵巣周期の確認を行った。また、歩数計を装着し発情行動の発現を調べた。発情徴候が見られたら、6 時間ごとに採血を行い、エストロゲン濃度を測定した。また、分娩後週 1 回採血を行い、代謝プロファイルテストにより栄養代謝状態を評価した。

【結果】

分娩後の初回排卵について、栄養代謝状態の良好な群では、平均27日であったのに対し、栄養代謝状態の良くなかった群では、平均41日へと遅延した。しかし、それらの排卵前の発情徴候に差異は認められなかった。また、排卵時の卵胞サイズにおいて、栄養状態の良好な群において大きな傾向が認められたが、血中エストロゲン濃度に差は見られなかった。その後の発情周期について、平均発情周期は約22日であり、栄養代謝状態による影響は見られなかったが、正常発情周期を示すウシの割合は、栄養代謝状態の良好な群が誘起に高かった。

本研究から、分娩後の栄養代謝状態が、分娩後の初回排卵や発情周期の正常性に関与していることが示された。しかし、発情行動に大きな差は無いため、本研究における栄養状態の差異は、発情徴候に影響を及ぼさないことが明らかになった。